

# 「はなやか」「はかない」人間

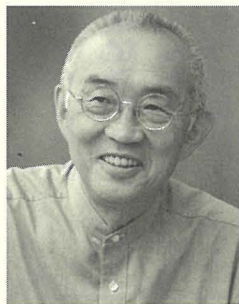
東京大学名誉教授  
月尾嘉男

## 奇跡の惑星

太陽の周囲を八個の惑星が周回している。地球の内側にある金星の平均表面温度は四〇〇度以上、外側にある火星は零下六〇度ほどである。中間にある地球は約一四度で、しかも表面の七割が水面であり、生命の存在にとつては最適の状態である。もちろん、無数の天体が存在する宇宙には、地球のような惑星も無数に存在するが、ごく最近、ヨーロッパ

の学者が発見した地球に類似の惑星でも距離は二〇光年の彼方である。

地球が奇跡の惑星といわれる由縁である。その結果、地球には推定五〇〇〇万種以上という多種多様な生物が棲息することになった。人類は、この膨大な種類の生物のうちの一つでしかないが、現在、六五億人が生存し、五〇年後には九〇億人を突破するとさえ推計されている。生物社会の基準では、個体の増加は成功の



つきお・よしお/昭和十七年、愛知県生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、同大学院新領域創成科学研究科教授などを経て、平成十五年、東京大学名誉教授。「未来フロンティア紀行」(北海道建設新聞社)、「ヤオヨロズ日本の潜在力」(講談社)、「縮小文明の展望」(東京大学出版会)など著書多数。

証拠であるから、人類はもつとも成功した生物ということになるが、見方によっては異常な成功である。

## 一二月三二日に登場する人類

地球の歴史は四六億年と推定されている。その水中に最初の原始生命が誕生したのは地球誕生から六億年後の約四〇億年前のことであるが、生物が陸上に進出するのには時間がかかり、現在から四億年前のことであった。それ以後、何度かの大量絶滅を経験したものの、生物は爆発と表現されるほど多種多様に増大し、人間が確認しているだけでも約三〇万種類の植物と一〇〇万種類以上の動物が生存している。

その頂点に君臨するのが人類であるが、その登場は生物全体の歴史からすれば、きわめて最近のことである。現在の人類には直結しないが、人類の最遠の祖先となる猿人は五〇〇万年前、以後、原人が一五〇万年前、旧人が約五〇万年前、そして直系の祖先であるクロマニオンなど新人の登場が約二〇万年前というのが現在の科学の見解である。実感でき

ない巨大な数字を理解するため、以下のように説明してみる。

地球の誕生から現在までを一年に圧縮し、誕生を二月一日〇時〇分、現在を一二月三二日から新年に移行する直前とする。この時計では、生命が陸上に進出した四億年前は一月末になり、すべての人類は一二月三二日に登場する。猿人が一六時三〇分、原人が二一時一〇分、旧人が二時三十分、そして新人の登場は二時三十分である。生命が陸上に進出した以後の時間で計算しても、最後の〇・〇五%という最近のことである。

## 一瞬の花火とならないために

ところが、地球では新規参入の生物が異常な行動を開始した。一万年前といえば、前述の時計では現在から約一分前であるが、当時の世界人口は五〇〇万人ほどであったから、この最後の一分で、六五億人と二二〇〇倍以上に増加したのである。しかも、二〇〇年以前にエンゲルスが指摘したように、二〇〇〇年前には約三億人、一世紀前には一六億人、五〇年前には二五億人と等比級数で

増加してきた。

さらに人類が同様に増加させたものがある。エネルギー消費である。一万年前は人類が農耕を開始する直前であり、一人が一日に消費するエネルギーは二五〇〇キロカロリーあれば十分であった。そして現在の生活を成立させるために必要なエネルギーは約二五万キロカロリーと一〇〇倍に増加している。人口の増加と掛算すると、地球の歴史の〇・〇〇二%、陸上生物の存続時間の〇・〇五%という一瞬に一二万倍に爆発したのである。

これが現在の環境問題の根源であるが、この異常な状態を維持できれば問題はない。しかし、現在のまま突進すれば、大半の鉱物やエネルギー資源は一〇〇年以内に枯渇し、森林は四〇〇年で消滅する。当然、人類はそれ以前に絶滅の危機に直面する。人類という生物は地球の歴史に打上げられた一瞬の大輪の花火になりかねない。

この「はなやき」と「はかなき」を認識することが、これからの哲学の最初の一步でなければならぬ。